

少雨に関する農作物管理について

平成25年5月21日

営農支援課

○普通作物

1 早期水稲

今月下旬から6月にかけて幼穂形成期を迎えるが、用水が不足すると収量の低下などが懸念される。地域で話し合い、計画的な配水により用水の確保に努める。

1) 分けつ期から幼穂形成期頃までにあるものの対策

【水管理】

- ① 分けつ期にあるほ場では、2～3日毎に走り水程度のかん水で間に合わせる。
- ② 1株の茎数が20本程度になったら中干しを行うが、強い中干しを行うと、ほ場によってはその後の水持ちが低下する場合があるため注意する。
- ③ 中干し後の水管理は、間断かん水とするが、水系ごとに用水が確保できるよう計画配水を行う。
- ④ 河口に近いところでポンプ揚水を行う場合は、海水が混入しないように注意する。

【その他の管理】

- ① 6月になると箱施薬の効果が低下し、いもち病や害虫の発生が多くなってくるので、観察に努め地区防除基準等により防除を行う。
- ② 穂肥は、必ず幼穂長（1cm位）を確認した上で、葉色に応じ、適量を施用する。

2 普通期水稲

現在、育苗・田植え時期にあるが、用水不足になると育苗日数が延び、苗の徒長や老化、病害の発生が懸念される。

また、移植後の本田での用水不足は、活着や分けつの遅れなどが予想される。

1) 育苗期から田植え期にあるものの対策

地域で話し合い、計画的な配水により用水の確保に努め、田植が出来るよう心掛ける。

【老化苗対策】

- ① 育苗日数が延びることを想定し、播種量は厚播きとしないよう注意する。
- ② 苗が伸びやすいため、温度管理は高温としないようにする。
- ③ 播種後25日を過ぎると肥料切れしてくるので、1箱当たり成分量で0.5g程度の窒素を追肥するとともに、散布後かん水して葉焼けを防ぐ。
※（例）苗箱1箱当たり「硫安3g」を0.5ℓの水に溶かして散布

- ④ 育苗の後期は、寒冷紗等で遮光し高温を防いだり、苗箱の間隔を広げて通気を良くする。また、苗へのかん水は出来るだけ控える。
- ⑤ 育苗期間が長引くと苗いもちが出やすいので発生に注意し防除する。

【田植え対策】

- ① 地域で話し合い、計画的な配水を行うことにより、代かき・田植えを実施する。
- ② 水持ちの悪い水田では代かきを丁寧に行い、また畦畔からの漏水を防ぐ。
- ③ 苗が軟弱徒長となり、移植作業に支障を来す場合は、第2葉の中央部から剪葉し、植え付ける。
- ④ ほ場内に通水用の溝を作り、短時間に水が回るようにする。

2) 活着期から分けつ期にあるものの対策

- ① 節水の必要がある場合は、2～3日毎に走り水程度のかん水で間に合わせる。
- ② 除草剤を散布したら、用水が切れないように注意する。
- ③ いもち病や害虫の早期発見に努め、発生を確認したら防除する。

【その他】

- ① 育苗日数が40日以上経過し、老化・病害により移植に耐えられないことが想定される場合は、早めに育苗センター等に連絡をとり、苗の確保に努める。

○野菜

1 全般

乾燥により生育遅延や草勢の低下、害虫の多発が予想される。また施肥の効果が出にくくなるので、井戸や畑かん施設が整備されている地域では適量のかん水を行う。

2 かんしょ

かんしょは定植時期であるが、晴天日の定植は欠株が発生しやすいので、取り置き苗を夕方定植したり、垂直植えにするなどして、マルチに植え付けた苗の先端がくっついて高温でやけないように注意する。

3 病虫害防除

- 1) 乾燥が続いており、普段は薬害のでない薬剤でも薬害が出やすくなるため、薬剤散布の前日は作物にかん水し、薬害を防止する。
- 2) アブラムシ、ダニ、鱗翅目幼虫、うどんこ病の多発しやすいので発生初期から薬剤散布を徹底する。

○果樹

1 ぶどう

ぶどうは浅根性で、土壌乾燥の影響を受けやすい。この時期の土壌水分不足は、果実の初期肥大に大きな影響を及ぼす。用水を確保し、全面かん水を行う。

2 露地かんきつ類

乾燥状態が続くと、露地かんきつ類ではハダニの発生が多くなる。冬季のマシン油乳剤を散布できなかった園地は特に注意が必要である。発生状況を確認し、早めの防除を実施する。

○花き (キク、シキミ等)

1 共通

用水を確保し、生育に応じたかん水を実施する。用水の確保が難しい場合は、通路に敷きわら等でマルチを行い、土壌水分の蒸発をできるだけ抑える。

2 夏秋ギク

乾燥・高温の影響で開花が前進化することがあるので、気温が高い時間帯は、寒冷紗等の遮光資材を被覆し、頭上散水や循環扇等を利用し、乾燥防止とハウス内気温の低下を図る。

3 シキミ

今春に植え付けた1年生幼木については、乾燥による枯死や生育不良が懸念されるので、かん水を実施するとともに、根元に敷きわらを行い土壌の乾燥を避ける。また、乾燥状態が続くとハダニ等の発生が多くなるので、早期防除を実施する。

○その他の注意事項

かん水にあたっては、土地改良区や水利組合等に用水状況を確認して行うとともに、効率的に実施すること。